

目 次

I	テーマ設定の理由	71
II	研究仮説	71
III	研究の全体構想図	72
IV	研究内容	73
	1 生徒が活動し易い環境	73
	(1) 英語学習における環境作り	73
	(2) 英語教室の設営と場面設定	73
	2 コミュニケーション重視の指導法	73
	(1) 意味・機能のシラバスについて	73
	(2) 「場面、トピックス、語彙」シラバス	73
	(3) 「文型」シラバス	74
	3 異文化理解への対応	74
	(1) 英語教育における文化	74
	(2) 異文化への理解	74
	(3) 異文化ギャップの実際	74
	4 言葉の意味・機能を考えた一単元の授業展開の工夫	74
	(1) 基本的な考え方	74
	(2) 教科書の扱い方	75
V	授業の実践	76
	1 単元名	76
	2 単元設定について	76
	(1) 生徒観	76
	(2) 教材観	76
	(3) 指導観	76
	(4) 評価計画	76
	3 単元の指導内容	77
	(1) 言語活動を通しての指導	77
	(2) 言語材料を通しての指導	77
	4 単元の指導計画と配当時間	77
	5 本時の授業	78
	6 授業の考察	78
VI	研究の成果と今後の課題	80

「異文化コミュニケーション能力」を育てる指導法の工夫 ——言語や文化についての学習指導を通して——

豊見城村立豊見城中学校教諭 金 城 正 子

I テーマ設定の理由

現代社会は、科学技術の進展や経済の発展に伴い、情報化・国際化が急速に進んでいる。様々な分野において国際交流が行われ、年々留学生の数も急増し、ボーダレス時代とも言われている。この現象は世界の国々の距離を短縮し、自分達とは異なった人々や文化に接する機会を増やすことになった。

このような社会の変化に伴って学習指導要領では、国際化の進展などに主体的に対応し、国際社会の中に生きるために必要な資質を養うという観点から、新しい英語の学力観が打ち出されてきた。すなわち「コミュニケーション能力の育成や国際理解の基礎を培う」ことが重視されてきた。その結果、教科書の中にも変化が現れ、英語圏以外の国々や人々も以前より多く登場するようになったり、日本を外国の人々に伝える場面が取り上げられるようになってきた。

そこで、これまでの「多量の学習事項を知識として詰め込む英語教育」から、「意思疎通を図る能力の育成を重視する英語教育」へと改善が図られるようになってきた。学校現場には多くのALT（英語指導助手）が配置され、英語の授業も、週4時間実施する学校も増えてきた。

しかし、実際には、多くの生徒にとって、まだまだ「実際の場で使える英語」にはなっていないのが現状である。すなわちテキストに関する質問には答えられるが、それ以外の事項については、英語で表現することが難しいと感じている生徒が多い。

「コミュニケーション能力を育成する」ということは、外国人とコミュニケーションを取ることであり、自分とは違う文化的背景を持った人々と意思疎通を図ることを意味する。言語を学ぶと同時に、その背後にある言語の基礎となる文化を学ぶことによって、生徒は自分達とは異なる文化やその国に住む人々へ関心を示し、自分の考えを持つ。更に日本の文化や物の見方、考え方を基に、自分の意見を相手に伝えたいという気持ちになるであろう。

そこでこれまでの英語教育に加えて、異文化理解につながる指導を目指し、“言葉を大切にする”意識を育てたい。そのために、言語教育の環境作りや言語の背景となる発想、文化のつながりを重視し、英語教育の基礎・基本を大切にした指導を徹底する。それによって生徒は、異文化に対する関心・意欲が高まり、外国人の人々と意思疎通を図るコミュニケーション能力が向上すると考え、本テーマを設定した。

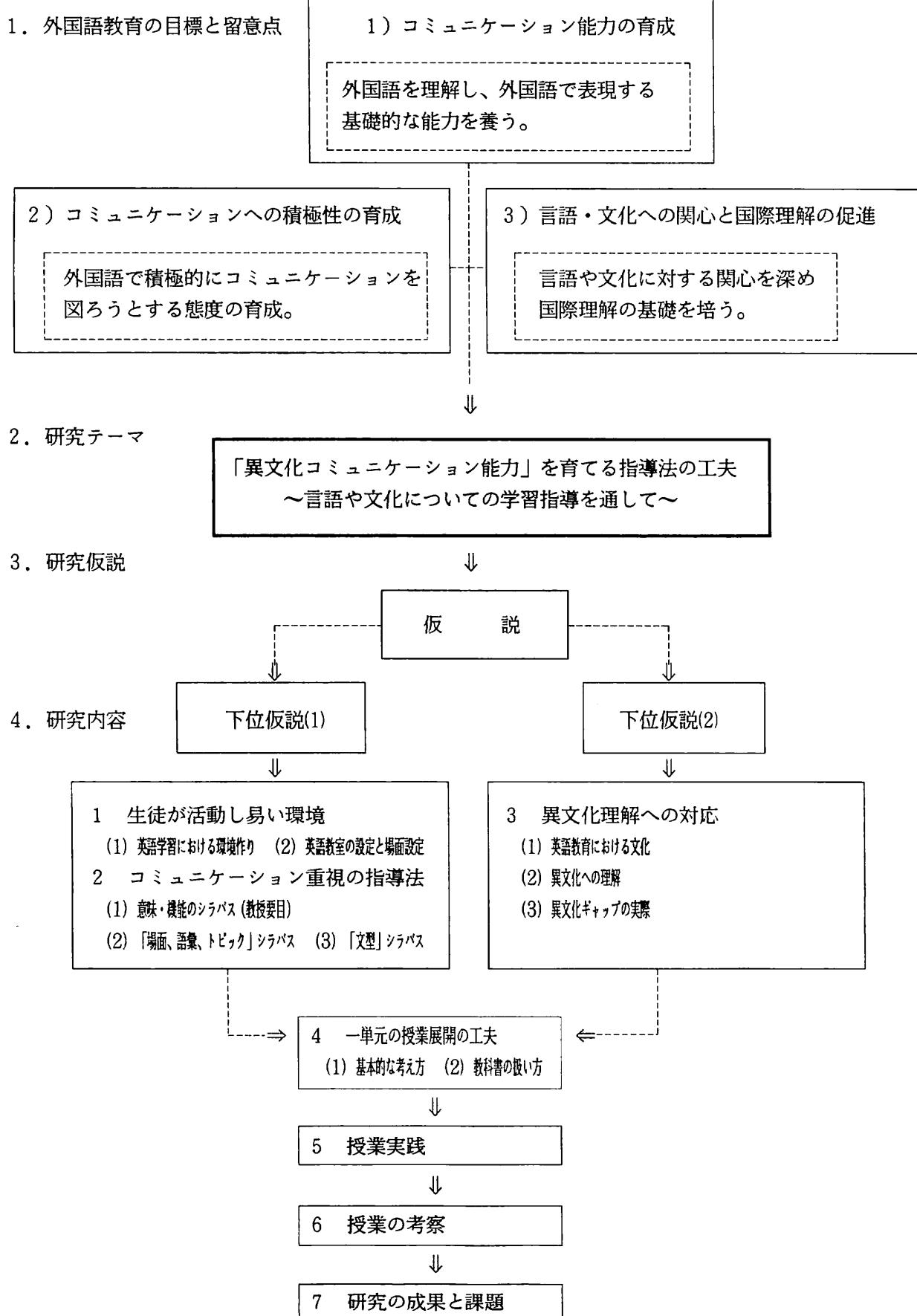
II 研究仮説

生徒が必要な時に適切な英語表現ができるような、活動し易い場面を工夫し発話を促す雰囲気を作る。更に、異文化理解を深めるために、基礎・基本となる言葉とその発想、文化のつながりを重視する。それによって、生徒は言語に対する関心を高め、英語独特の表現を身に付けることができるであろう。

[一下位仮説]

- 1 教室の環境作りを工夫し、ここで学習される言語文化をイメージするような「雰囲気作り」を心掛ける。その中で授業を行うことによって、生徒は異文化に興味を持ち、英語を話したいという気分になるであろう。また単語を指導する際、その言葉本来の意味や、その言葉から受けるイメージを考えさせることによって、生徒の想像力が働き、その言葉が使われる背景や場面を理解し、実際の状況に合った英語表現ができるようになるであろう。
- 2 異文化理解を深めるために、言葉とその発想・文化を重視する。つまり「言葉の中にある文化」を理解させることによって、生徒は言語に対する関心を高めることができるであろう。また“culture gap”が感じられる場面を設定し、生徒に類似体験をさせることによって双方の違いに気づき、自分の気持ちや考えを英語で表現したいという気持ちになるであろう。

III 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 生徒が活動し易い環境

(1) 英語学習における環境作り

生徒が「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育成するために、学習環境を整える必要がある。そのためにはまず教師と生徒間、そして生徒同志の人間関係を日頃から良く保ち、生徒が自由に発言できる雰囲気作りが大切である。特に授業中の教師の表情や言葉かけなどに気を配り、生徒の不安を取り除くような工夫に努めたい。

(2) 英語教室の設営と場面設定

更に英語のコミュニケーションの場として、教室の働きも重要になってくる。教室は言語そのものの学習以外に外国について学べる唯一の場所であり、その意味からも英語学習に適した設営が必要になる。例えば音楽教室や理科教室のように英語の特別教室を設置し、そこで学ばれている言語文化をイメージするようなポスターや品物で飾り、その国の文化を漂わせるような「雰囲気」を工夫する。それによって生徒は、わざかでも異国にいるという新鮮な気持ちで、その国の文化や英語の発想を学ぶことができる。 ☆教材 {・世界の国々のポスター、硬化（貨幣）、その国をイメージする色
音楽、民俗衣装、書籍類（英語辞典等）の設置

2 コミュニケーション重視の指導法

(1) 意味・機能のシラバス（教授要目=教授内容）について

「英語教育学において、選択の対象となる音声、文型、文法事項、語彙、場面、題材のようなものを教育内容、最近では教授要目（シラバス）と言い、目標に照らして要目を中心に設計したものをシラバス・デザインと言っている。」 「改定版 新・英語教育の研究」 片山喜雄・遠藤栄一

外国语教育に関して、1960年代から70年代は「国際化に伴って、言語そのものに焦点が置かれるようになった。それは80年代に、J.L.AustinやJ.R.Searleによる「言語の持つ働き、意味」などの主張がまた言語がどのような場で、どのように使われるかを問題にする社会言語学の立場から、D.Hymes やW.Lavoらの影響があったと言われている。

その後、今まで外国语教育ではあまり重視されていなかった、シラバス（教授内容）に焦点が置かれるようになった。そして今までの文法（構造）中心のシラバスの教育から、言語が表す意味・機能中心のシラバスを重視した教育が要求されている。この「意味・機能」中心のシラバスとは、ことばを使用する能力、コミュニケーション能力を養成することを目的とする。すなわち、「適切さ」がわかる能力であり、ことばを交わす相手や場面、背景など、いろいろな影響を受けるものである。

例えばデパートや買い物、道を聞くなどを想定して構成される「場面シラバス」などがある。

(2) 「場面、トピック、語彙」シラバス： それぞれの場面に適した、単語やトピックを選択する。

situation	words	topic
The Library 図書館	• book, librarian, student, quiet, novel chair, table, rule, dictionary	• Why reading is important ?
The Airport	• jet, pilot, passenger, flight, stewardess	• My first flight.
The Telephone 電話	• wire cord, dial tone, counters, long distance, collect call	• When a phone call better than a letter.
The Dentist 歯医者	• patient, tooth, office hours, Xray waiting room, toothache	• How to take care of your teeth.

(3) 「文型」シラバス： 基本文型が使われる状況を考慮し、ゲームを進めていく。

基本文型	ゲーム名	ゲームの進め方
He(She)is ~ ing. 〔現在進行形〕	What is he(she)doing? 「想像力コンテスト」	・人がいろいろな動作をしている絵を示し、生徒に想像力を發揮させ、[He(She)is～ing]の表現をさせる。
You _____. （動詞の過去形） 〔一般動詞の過去形〕	Pantomime vacation What did you do last Sunday? 「休日は何をしていたの」	・長期の休み後や、休日の後、生徒達に休みの間何をしたかをたづねる。 ate, watched, went to, listened to helped など、できるだけたくさんの動詞を引き出し、板書しておく。 各グループごとに分け、パントマイムで示し、英語で言い当てるというゲーム。
You have to ~しなければいけない。 You must not~ してはいけない。 〔助動詞〕	Sign matching. 「標識合わせゲーム」 ・標識のカードとその意味のカードを合わせるゲーム	・交通標識の図や、身の回りにある標識の図を用意し、それぞれの図の意味を英語で表現させる。例えば「歩行禁止」の図であれば、You must not walk。「止まれ」は、You have to stop など 標識カードとその意味のカードをそれぞれよく切り、生徒の机にばらまく。生徒は一度に2枚のカードを開けて、それらの標識と意味とが合っていれば得点になる。

3 異文化理解への対応

(1) 英語教育における文化

外国語学習を考える際、特に「言葉」が、どのようにその文化とかかわってきたかを重視しなければいけない。その意味での文化としては、「特定の時期における特定グループの習慣、信念、発想、など」が上げられる。

もう一つ、教科書で扱われる「文化」がある。一般に「顕在文化」と言われ、例えば、クリスマスハロウィーンなどの「祝祭日」から、食事のマナーなど様々なものが含まれる。そしてどれも、きちんとした形式やルールがあり、その文化の中にいる人であれば、一応みんなそれに即した行動をしているものである。これに対して「潜在文化」と言われるものは、人間関係のとらえ方やプライバシーの範囲など形式化されていないものである。そして私達が外国人と接する時、最も誤解や摩擦を感じるのは「顕在文化」よりもむしろ、「潜在文化」が主な原因となっていることが多い。

(2) 異文化への理解

外国人の人々の行動・生活様式を理解するということは、それについての書物やテレビやビデオなどを見たり、調べたりするなど知的な理解が多い。

しかし、実際に外国で生活をする場合、異文化に触れることによって、違和感や不快感を感じるようになる。つまり「文化摩擦」を経験する。その時私達は自分の文化が正しく、相手の文化が間違っているという考え方を持つ。

真の異文化理解へ到達するには、この考え方から一步前進し、自分の文化も相手の文化もそれぞれ価値あるものと、見なされなければいけない。

(3) 異文化ギャップの実際

① 日本人には自然なものだが、欧米人には不快感を与えるもの。

ア 「女性が手で口を押さえて笑う」

日 本： 女性らしいマナー 欧米人： 相手をバカにしたしのび笑いの意味

イ 「視線を合わせずに話をする」

日 本： 人と話をする時、目を見つめて話がちである。

欧米人： まともに視線を合わさない人には、不信感を持つ場合がある。

② 欧米人には自然なものだが、日本人には不快なもの。

ア 「大きな音をたてて鼻をかむ」

日本： 人前で鼻をかむ時、人のいない方向を向いたり、なるべく音をたてないようにかむ。

欧米人： 鼻をかむ時の音は、大きくてもかまわない。

② 日本人におけるコミュニケーション・ギャップ

ア 「食べ物をすすめる際の日米間のルール」

日本： あまり親しくない人に対しては、実際お腹がすいていても、最初「遠慮」するのが、普通である。

米国： 食べ物をすすめられた場合、遠慮して断るというルールはない。「～はいかがですか」と尋ねて相手が「結構です」と答えれば、再びすすめてはこない。

イ 「先輩－後輩の関係」（学校のクラブ活動において）

日本： 後から入った下級生は、掃除や球拾いなどが主で、実力があっても上級生と対等に活動したり、上級生より前に抜き出る事には抵抗がある。

米国： 日本のような、先輩、後輩の関係があまり存在しない。社会的にも、平等の立場を好む傾向がある。クラブ活動でも掃除や球拾いは全員の仕事であり、試合には先輩、後輩に関係なく、実力のある者が選ばれ、それを誇りに思う。

4 言葉の意味・機能を考えた、一単元の授業展開の工夫

(1) 基本的な考え方

- ① 言葉を用いる必然性を考え、常に適切な状況と場面を提供する。
- ② 教科書に出てくる文型や表現が、「実際にはどのような場面で、どのように使用される可能性があるか」を考える。

(2) 教科書の扱い方

① Pre-reading Activity（本文に入る前の活動）

ア 教科書を開く前に、生徒に自然に興味をわかせ、英語に対する意欲を持たせるようにする。

- ・ 教室内の掲示（授業で扱う国の様子にマッチした雰囲気を工夫する）
- ・ その月（季節）に合った英語の歌の紹介をする。
- ・ 前日のニュース（現代社会の話題等）を、生徒の既習英語で表現する。

イ 教科書の内容を予測させる。

- ・ 題材に関する背景的知識を与える。（生徒が持っている、題材に関する知識を引き出す）
- ・ 内容全体に係わるようなキー・ポイントとなる単語・語彙を確認し、その意味やイメージから内容へ結び付ける。
- ・ 教科書の場面を示し、その状況に合った言葉や表現を生徒から引き出す。

② While-reading Activity〔本文の概要・要点をつかむための活動〕

ア 本文をひと通りざっと読み、概要をつかむ。

- ・ あらすじをつかむ。（「誰が」「どこで」「何をしたか」「どうして」）
- ・ 特に大切な内容は何か。 ----- ↑ ↑

イ より詳しい内容（情報）を読み取る。 ----- ↑

- ・ 異文化理解（日本の習慣との比較など）

③ Post-reading Activity〔本文を読んだ後の活動〕

ア 本文中の重要語句や文法事項の確認をさせる。

イ 文化の違いや考え方の違い等について、自分達なりの意見を述べさせる。

ウ 教科書の内容をもとにロールプレイを行い、その後自分達の考えに基づいた活動まで発展させる。その他簡単なインタビュー形式や、調査活動などを取り入れる。)

エ 内容に合わせて、日記文や手紙文、報告文等を英文にまとめさせる。

V 授業実践（検証授業）

1 単元名： Lesson 2 “At a Party” (NEW HORIZON English Course 2)

2 単元設定について：

(1) 生徒観 [資料]：「教研式 指導要録観点準拠 教科書群別 開三教秀」

新観点別到達度学力検査 実現状況診断用 －新CRT Criterion-Referenced Test

ア「教科総合」

ア 教科総合	全国	男子	女子
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	54	45	55
表現の能力	65	49	57
理解の能力	71	58	66
言語や文化についての知識・理解	78	63	71

イ「領域別」

イ領域別	全国	男子	女子
聞くこと	66	64	68
話すこと	53	49	57
読むこと	65	60	70
書くこと	52	48	56

ウ「内容」

ウ 内容	全国	クラス平均
1 簡単な文を正しく聞き取ること	77	58
2 数個の文の内容を聞き取ること	78	73
3 簡単な質問に応答すること	72	58
4 アクセントや強勢の理解	59	45
5 文の基本的音調で読むこと	71	63
6 語や語句を理解して文を読むこと	77	72
7 文章全体の内容を把握して読むこと	73	63
8 適切な語句を使って書くこと	57	39
9 簡単な文を書くこと	77	70

① 全体的に静かなクラスだが、授業内容によっては、発話に関してやる気が見られる。

② 観点別到達度学力検査の結果から、総合教科としての観点では、全体的に「言語・文化」についての得点が高かった。しかし問題の内容自体が、英語表現を主にしたものだったので、生徒の文化的な事項に関する実力を把握することはできなかった。また4つの領域の中では「話すこと」と「書くこと」の落ち込みが目立った。その内容をさらに細分化すると、「アクセントや強勢の理解」と「適切な語句を使って書くこと」の内容に関して、全国との比較に大きな差を見ることができる。

この落ち込みの原因として、英語の学習の目的を、単語や文の意味をわかるだけにとどまり、自分の気持ちを相手に伝える「ことば」としての機能を理解していないためだと考える。単語1つにおいても、どのような状況で使われる言葉なのかを考え、実際に使える言葉としての英語学習を工夫させたい。

(2) 教材観

- ① 場面と目的に見合った言葉遣いの重要性を考えさせる。
- ③ 言葉の機能という視点から、適切な言葉の遣い方への意識を持たせる。
- ④ 異文化理解を深める。

(3) 指導観

- ① 英語に対する興味・関心を深める。
- ② 実際の状況を通して、お互いの習慣や考え方を気づかせる。
(このような時、私だったらどのような対処をするかの場面を設定する)
- ③ コミュニケーション・ギャップについて、理解を深める。

(4) 評価計画

- ① キー・ワードとなる単語 (Birthday) に関する言葉をイメージできる。
- ② 過去形 (不規則動詞) を含む文や意味を、聞いて／読んで理解できる。
- ③ パーティーの持ち方について、日米の比較ができる。

- ④ 場面と使用目的に見合った表現を選択して使える。
- ⑤ 日米におけるコミュニケーション・ギャップを通して、自分の意見をきちんと述べ、且つ自分達とは違う人々の物の見方や考え方を理解し、受け入れる態度を育てる。

3 単元の指導内容

(1) 言語活動を通しての指導

- ① パーティーでの会話表現を中心に、誕生日の挨拶、初対面の人への話かけなど、それぞれの場を設定して、発話練習を行う。
- ② 言葉を話す場合には内容だけでなく、場面や相手に応じた適切な表現がある事に気づかせる。
- ③ 発展的な英語の学習を通して、文化や社会背景などが異なる世界で生きている人々を、積極的に理解し、受容しようとする意識を育てる。

(2) 言語材料を通しての指導

- ① 不規則動詞の過去形 : see > saw , say > said , go > went
- ② パーティーでの会話 : My name is ~. Nice to meet you. This is ~.
- ③ 英語の丁寧な表現 May I ~? I would like to ~. Please ~ .
- ④ 異文化理解に関する言葉 : We have to(help, love, compromise (歩み寄る) understand, etc) each other. (私達はお互いに ~ しなければいけない)

4 単元の指導計画と配当時間

[Lesson 2 - At a party - 5 時間計画]

<p>〔第一時〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語学習に対する意識を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> (1) English-Song “First Of May” 「暮の頃」の歌詞内容説解 (2) 教材に関する背景的知識（パーティーの持ち方） (3) 単語のイメージ付け（キー・ポイントとなる単語—Birthdayから発展させる） ・自分の誕生日の由来についての紹介（資料から） (4) 英語教室の環境作り （アンケート）
<p>〔第二時〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しい言語材料の提示 	<ul style="list-style-type: none"> (1) Pattern Practice —不規則動詞の練習（先週の日曜日に行った事から、過去形の指導に結び付ける。） see > saw , say > said など。 (2) 「許可」「依頼」の表現 ⇒ Can I ~? May I ~? Could you ~?
<p>〔第三時〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パーティーを通しての、アメリカ社会の 社会性について考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> (1) パーティーで交わされる会話 (2) パーティーの持ち方について（日米の比較） (3) いろいろな言葉で「こんにちは」 —（話しかけの練習） Spanish, Hindi, Arabic, German, France, China, Russian, Koreaの言葉紹介
<p>〔第四時〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉を話す時には、内容だけでなく、場面や 相手に応じた適切な表現がある事に気づかせる。 	<ul style="list-style-type: none"> (1) 丁寧な英語の表現（相手によって、表現の仕方を考える） (2) 異文化理解 （1st 場面） <ul style="list-style-type: none"> ・Appropriate Question Checklist (初対面の人に対する、適当な質問事項)
<p>〔第五時〕 本時</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発展的な英語の学習を通して、文化や社会的 背景などが異なる世界で生きている人々を、積極的に理解し、受容しようとする態度を育てる 	<ul style="list-style-type: none"> (1) 異文化理解 (2nd 場面) -Cultural Encounters(異文化との出会い) (3rd 場面) -Cultural Question Checklist (文化的質問事項) (2) 日米におけるコミュニケーション・ギャップ <ul style="list-style-type: none"> ① もてなし方・もてなされ方に関するルール ② 先輩と後輩の関係に関するルール

5 本時の授業

-Culture Target-	-Teaching Procedure-	-Notes-
<p>■導入(5min)</p> <ul style="list-style-type: none"> • Warming-Up <p>■課題(30min)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 異文化との接觸 <p>New Zealandの学生たと、自分達の学校生活を比較しながら、英語表現を心がける。</p> <ul style="list-style-type: none"> • アメリカ人と日本人の間では何を重視すべきかを考える。 • 日本人とアメリカ人の間で、上下関係というものに対する隔たりを考える。 <p>■まとめ(10min)</p> <ul style="list-style-type: none"> • コミュニケーション・ギャップを通して、お互いがうまくやっていく為(どちらも傷つかないようにする為には、どうすれば良いかを考えさせる。) 	<ol style="list-style-type: none"> 1 Greeting <ul style="list-style-type: none"> • 前時で扱った初対面の人への質問事項の発表 {ALT ⇄ 生徒} 2 Cultural Encounters <ol style="list-style-type: none"> (1) Late for class. (—授業に遅れて来る時—) (2) How Can I Eat This? (どのように食べたらいいの?) 3 School Questionnaire (学校に関する質問) <ol style="list-style-type: none"> (1) How many days each week do students go to school? (2) What do students wear in school? (3) What punishments (if any) do teachers use when students do something wrong in school? 4 日米におけるコミュニケーション・ギャップ <ol style="list-style-type: none"> (1) もてなし方・もてなされ方に関するルール <ul style="list-style-type: none"> • 日本人の夕子に対する意見を、グループで考える。 (2) 先輩と後輩の関係に関するルール <p>(日本人とアメリカ人の間で、上下関係というものに対する隔たりを考える。)</p> <ul style="list-style-type: none"> • ロバートについての意見を、グループで考える。 5 今日の授業を振り返って、異なった国々の人達と仲良くやっていく為に、必要な言葉をイメージさせる。 例えば、helpなど。 We have to ~ (help, love, give.....)each other. 私達はお互いに～しなければいけない。 	<ul style="list-style-type: none"> • 初対面の人に対して失礼にならない事項を尋ねる。 • ALTと生徒の意見が異なる場合は、それぞれに考え方の理由を尋ねる。 • ワークシートを用いる • お互いの意見、あるいはALTとの意見の比較をさせる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 異文化理解の為の言葉 compromise 歩み寄るを紹介する。 </div>

6 授業の考察

- (1) 英語への興味づけの為に、English-Song “First of May” 「若葉の頃」の歌詞を配付し、生徒のわかる単語を紹介してもらった。いきなり英文の意味を問うと緊張するが、生徒の既習単語を板書させ、出された単語を連ねたり意味を尋ねることによって、少しずつ全体の内容に近づけることができた。その後曲を流すことで、内容を把握しながら新たな興味を持って聞くことができた。
この曲を紹介した理由の1つに、季節に対するイメージづけもある。曲名の“May”と“若葉”との関連を生徒に問い合わせながら、その時の季節(春-4月、5月、緑、さわやか、若葉等)に対する、彼らのイメージを広げることができた。
- (2) 教科書の单元 “At a Party” から、キー・ポイントを “Birthday” にし、初めは自分の誕生日に関する由来を紹介した。January からDecemberまでのラテン語による由来を知り、それを英語でみんなに発表し、あるいは友達の発表を聞くことによって、改めて誕生日に対する関心が深まった。次に、“birthday”に関する英単語を尋ねると、cake, candle, present, party, Happy birthdayなどが上げられた。これらの単語から、「誕生日」に関する場面を思い浮かべさせ、これから学習する教科書の内容についての背景を予想させることができた。
- (3) 英語教室設営について
音楽室や理科室などのように、英語の授業にも特別室をという考え方から、学校の空教室を利用して英語教室を設置した。その環境の中で、実際の言語活動以外に物的環境の工夫を試み、異文化理解の助けという点からも、世界中の子供達の写真を中心に、何カ国かのカラー写真を掲示した。

【生徒のアンケートから】

① 春をイメージする色は？

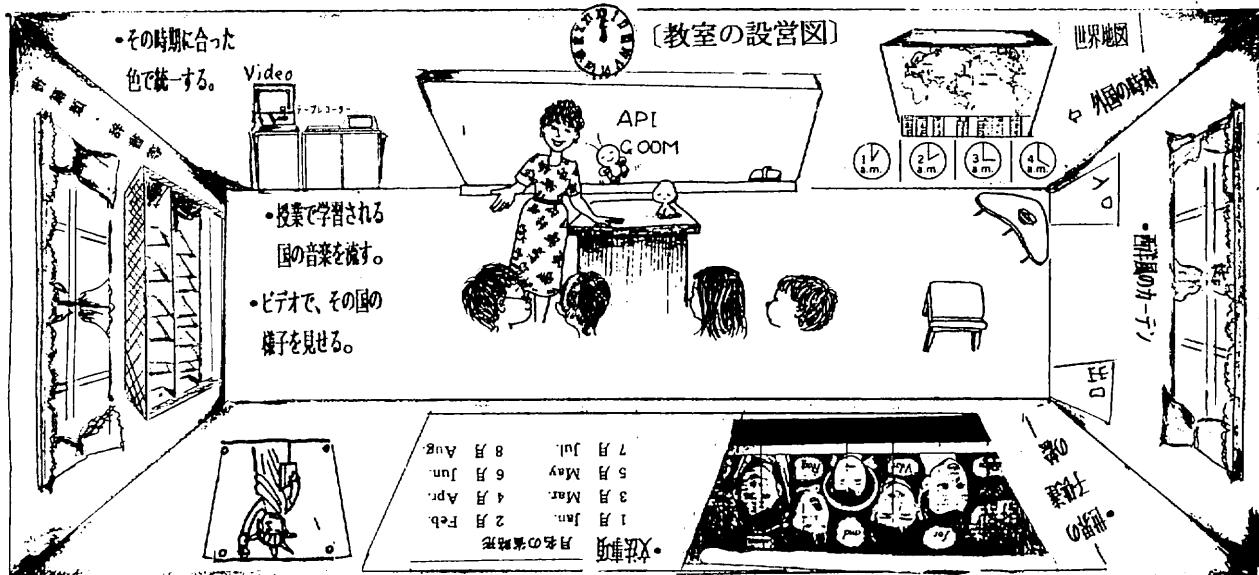
- light green,pink,blue,yellow,orange

② 英語を勉強する雰囲気のために、教室に何を飾りたいですか？

- 英語の本、アメリカの国旗、外国人（人）の写真、お花、ハロウィンのポスター
- 英語の歌、かわいい英語の文字、教科書に合わせた掲示物、
- セサミストリートのグッズ、単語表、過去形表
- 授業で先生からもらったプリント等

《 英語教室で授業を終えての生徒の感想から 》

- 外国へ行った感じがする。
- 教室を離れてやってみて、緊張したけど、外国の気分があり楽しかった。
- 回りを見たら全部英語の物（掲示物など）だったので、外国で英語を習っている感じがした。
- いつもの教室と雰囲気が変わって良かった。
- いろいろな文化がわかって楽しかった。



(4) 異文化理解の場面

A : もてなし方、もてなされ方に関するルール

(日米間において他家を訪れる際、何を最も重視すべきかを考える。)

〔場面〕 アメリカに滞在中の日本人（夕子）が、アメリカ人の家庭に夕食に招かれて、手土産を買
い求めた後、30分遅れて招待側の家に到着したという場面。

生徒のアンケートから、夕子に対して「時間を守るべきだ」「アメリカの生活様式を知らなさすぎ」などの批判的な回答が、クラス全体の87%を占めた。その理由としてアメリカ社会では、「時間を守るべきだ」や「お土産は要らない」の声が多かった。ティームティーチングにおいて New Zealand 出身のALTからは、“Time is money”（自分の時間はとても大切なもので、他人に奪われたくない）という意見であった。

ALTを前にしていたためか、生徒からは「たとえ日本人でも外国に居れば、その文化に合わせなければいけない」の考えが強く感じられる。

B 先輩と後輩の関係

(日本的な先輩・後輩のルールと、アメリカ的な対等の人間関係のルールの間のずれ)

〔場面〕 日本の高校で勉強始めたアメリカ人の留学生ロバートが、彼の所属しているクラブの先
輩からパーティーに出席するように声をかけられたが、試験が近いため出席できないと告げ
るという場面。

あなたがロバートの立場であったらの問いに、「パーティーに顔だけ出す」や「パーティーに参加する。」の意見が約50%、「言い方に気を付けて断る」「ロバートのように断る」が33%となつた。ALTの意見としては、アメリカ的な対等の考え方から「自分のテストの方が大事だが、日本にいるということも考慮して「顔だけ出す」の回答が出された。生徒のほとんどが部活動に参加しているためか、先輩との関係をうまく保とうとしているのが半数、逆に先輩の声に絶対服従という従来の集団志向型よりも、個人中心型も見られるようになっている。

- (5) 異文化理解のまとめとしてグループごとに、英語による自己表現をさせる予定であったが、中2の1学期の段階では困難さを感じられた。そのためある程度の形(We have to ~ each other)を与えておき、異文化理解をイメージする単語のみを発表させるようにした。(help,love,giveなど)

VI 研究の成果と今後の課題

1 成 果

{－下位仮説1より－}

- (1) 言語学習の環境作りという観点から、物的環境（英語教室）を整えることによって、生徒の外国に対する興味を引き出すことができた。同時に、英語学習をする目的にも、自然に気づかせることができた。物的環境に対して、人的環境（英語教師の話かけ、服装やALTの存在）も、英語学習の環境であり、二人の英語によるコミュニケーションには、生徒の普段とは違う見方があった。
- (2) 「言葉の意味と機能」については、生徒に「言葉を使う必要性」を考えさせる良いチャンスでありこれまでの受信型の英語から、発信型の英語へ近づけさせることができた。学習の過程においても、いきなり教師が教え込むのではなく、生徒のわかる英語から導くことによって、お互いの意見を興味深く聞く態度を身に付け、自らも答えを出そうという意欲が見られた。その他単語を印象付けるために、教科書以外に音楽や英語の詩を導入することで、言葉のイメージをふくらませることができた。

{－下位仮説2より－}

- (1) 英語学習の中に異文化理解を取り入れることでは、いろいろな方法が考えられるが、特にALTとのティームティーチングは、効果的であった。彼の話ぶり、服装、顔の表情そのものが異文化との出会いであり、それらを通して欧米の学校生活の様子を理解し、お互いの文化の違いも発見することができた。
- (2) 世界の子供達のピクチャーを掲示することによって、この地上には様々な国々とそれぞれの文化があり、「お互いの文化を大事にし、助け合わなければならない」という、異文化理解の目的に気づかせることができた。

2 今後の課題

- (1) 教科書の使い方を見直し、各Lessonにおける単語と場面と文型の結び付きを工夫する。
- (2) 学習過程における生徒の予測を重視し、異文化についての調べ学習を奨励する。（図書館利用）
- (3) 「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能と「異文化理解」とのバランスを考慮する。
- (4) 外国語を学ぶ環境としての英語教室の充実について、校内で共通理解を図る。
- (5) 外国語学習に対する興味・関心・意欲を一層高めるために、視聴覚機器の充実と活用について、校内で、指導計画を立てる。

《 主な参考文献 》

片山喜雄・遠藤栄一・佐々木曜・松村耕男	『改訂版 新・英語科教育の研究』	大修館書店	1994年
吉田研作	『外国人とわかりあえる英語』 －異文化の壁をこえて－	ちくま新書	1995年
西田ひろ子	『実例で見る 日米コミュニケーション・ギャップ』	大修館書店	1994年
東後勝明	COLUMBUS 通信 BOOKLET	光村図書	1995年
松畑熙一	『英語コミュニケーション能力評価実例辞典』	大修館書店	1994年